



## 愛知川の現況・課題

愛知川(えちがわ)は、鈴鹿山脈の御池岳や御在所山付近に源を発し、永源寺で合流し、東近江市域からびわ湖に注ぐ一級河川である。

愛知川は、かつてアユがあふれるほど泳いでおり、アユの川として全国に名を知られ、大勢の釣り人でにぎわっていた。

しかし、近年、河川中流域では水が干上がる「瀬切れ」が起きたり、ダム下流区間において濁り水が長期間滞留したりするなどの様々な問題によって愛知川のアユは大きく減少した。また、川で遊ぶ大人や子どもも減少し、それとともに川辺にゴミが溢れ、また草木が生い茂り、人が容易に近づけない環境となり、その対策が求められた。



## 小学校との連携の経緯

きれいな川辺・豊かな川を取り戻そうと、平成25年度に漁業者や地域住民が中心となって「愛知川清流会」を設立し、活動を開始した。

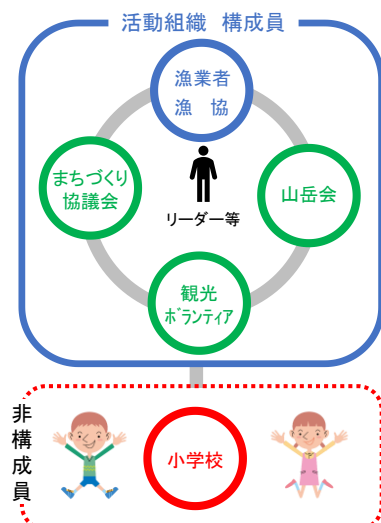
また、「川に近づかない」と教育されてきた子どもたちの川離れが深刻化しており、将来の里川の維持に不安を覚えたことから、地元小学校との連携も、保全活動とともに進めることにした。



## 小学校との連携体制づくり

滋賀県では学校教育の一環として、県内小学5年生を対象に「びわ湖学習」を実施している。当学習は、ふるさとやびわ湖の自然を体感し、郷土を大切に作る心や環境について考え・行動する力を身につけることを目的とする。カリキュラムは、まず事前学習として地域の人などから身近な自然やびわ湖のことを学ぶ。その後、学習船「うみのこ」に乗船・宿泊し、共同生活やびわ湖の自然や生命と直接向き合う学習を行う。

以上のように、県内の各小学校では、「うみのこ」に乗船する前に、事前学習の場や題材、人材を地域で探し、子どもたちに学習させる必要がある。そのマネージメントは、転勤の多い先生たちにとって非常に困難で、負担が大きい。そこで、当会の趣旨を学校に説明し、地元の川を良く知る構成員が子どもたちを見守る中で、川で遊び・学ぶ学習会を連携して進めないかと相談し、体制を構築し、活動を展開することにした。



主体	各主体の役割
漁業者・漁協	保全活動の主体。学習会指導（組織側の運営）。
まちづくり協議会	同上
永源寺観光ボランティア	同上
永源寺山岳会	同上
小学校	環境学習会の実施（学校側の運営）。

## 小学校との取組

当会と小学校が連携して開催している学習会は、5年生児童を対象に「びわ湖学習」の事前学習として実施している。

学習会では、①水生昆虫調べ、②魚類調べの体験学習を実施する。学習会は、夏休み前の6～7月の期間中で、2日に分け行う。

水生昆虫調べでは、当会が行うモニタリング活動（10定点）の1地点で行い、実際に採集と分類を体験してもらっている。水生昆虫の分類は、水質階級に分けた生物の下敷きを児童に渡し、それを見本に同定し、分類毎に数を計数し、水のきれいさを判定してもらっている。

一方、魚類調べでは、愛知川の支川で、子どもたちにタモ網を持たせて、ガサガサと魚を採捕してもらい、それを水槽に入れ観察しながら、魚の種類やその生活、また生息環境の現状などについて座学する。



## 連携の効果と今後の方針

小学校と連携した学習会は、児童や先生に好評で、今年で11年目を迎える。また、これまで無事故で学習会を開催できており、安全の中、安心して環境学習を行えるのは大変ありがたいと、学校から感謝されている。加えて、子どもたちが元気に笑い、川で学習する姿は、構成員のモチベーションの維持にもつながっている。

一方で、愛知川の河川環境・景観については、長年の草木伐採や清掃活動により、きれいな川辺となり、地域住民や観光客の多い永源寺住職から喜ばれるようになった。しかし、アユが跳ねる豊かな川の実現は未だ達成しておらず、問題となる「瀬切れ」や「濁水の長期滞留」、また「河床のアーマー化」の解決に向けた取組の検討・実行が求められる。

当会では、「内水面漁業の振興に関する法律」（H26年制定）に基づいて設置された「愛知川内水面漁業振興協議会」に委員として参画し、これらの課題について、問題提起などを続けている。今後は、小学校との連携だけで進めるのではなく、河川行政や研究機関等と連携した取組も展開できればと考える。